



11月20日に研究結果の報告を行った。テーマは「伝説圏概念の生成と適用性の分析——民間文学の空間的転回について」であり、主に伝説圏概念の生成と発展、伝説圏概念の中国における応用、日本の口承文学の転回及び民間文学の空間的転回の再考という三つの構成に分けて報告を行い、先生方から貴重な意見を頂いた。

今回の訪問と交流で、日本における「伝説圏」の概念の生成過程を明らかにすることができ、また先生や学生との交流を通じて中日の民俗学研究における類似点と相違点を理解する事ができた。ご指導、ご配慮くださった周星先生、成田紅音さん、サポートくださった余瑋さんとホビトさんに感謝したい。

豊かな学術饗宴—日本における日中 ドラゴンボート文化比較研究で得たこと

李瑜恒
(中山大学)



2024年1月9日に、私は広州からやって来て神奈川大学に到着し、20日間の訪問研究を開始しました。私の中山大学における博士課程の研究対象はドラゴンボートの習俗で、対象とする地域は中国広東省の珠江デルタです。ドラゴンボートレースは長い歴史を持ち、我が国南部の多くの地域で行われており、国の各階級別の代表的非物質文化遺産の保護リストにも名を連ね、高い研究価値を有する民俗のスポーツ行事です。日本にも同様にドラゴンボートレースの歴史があり、地域ごとの文化や特色があるということが、私の研究への関心を刺激しました。神奈川大学に来る前に、私は以下の課題について検討する計画を立てました。

1. 日本のドラゴンボートレースの歴史的起源はどのようなものか？
2. 日本のドラゴンボートレースにはどのような伝統的儀式があるか？
3. 日本のドラゴンボートの形状はどのようなものか？
4. 日本のドラゴンボートレースの現代への継承はどのような状況か？
5. 日本のドラゴンボートレースと中国のドラゴンボートレースの類似点と相違点は何か？

幸いなことに、私の指導教員の新垣夢乃先生や非文学資料研究センターの成田紅音さん、その他の歴史民俗資料学研究科の先生方には大いに助けていただきました。新垣先生は私に沖縄の民俗に関する本を提供してくださり、横浜のボートレース協会や博物館の担当者と連絡をとるための手助けをしてくれました。成田さんは多くの書籍や資料を探すのを手伝ってくれました。また、成田さんは日本滞在中の私の生活上の多くの問題を解決してくれ、その熱心なサポートのおかげで異国で生活する上での様々な不安が解消されました。

神奈川大学には非常に豊富で貴重な民俗学資料があり、私は神奈川大学での20日間に、非文字資料研究センター、歴史民俗資料学研究科、日本常民文化研究所、図書館に行き、自分にとって必要な多くの参考文献を見つけることができました。『球陽』は日本のドラゴンボート

レースの歴史的起源や伝説が記載された非常に重要な歴史文献です。『沖縄船漕ぎ祭祀の民族学的研究』という本には、沖縄各地でのドラゴンボートの活動が記録されています。この本からは、例えば糸満市のハーレーボートレースは地元の漁船から発展し、レース当日は祈禱の儀式を行ったり、ハーレーボートを故意に転覆させたりする、といった流れについて、あるいは、西表島の祖納で行われるドラゴンボートレースは、地元の田植え儀式と組み合わせられ、五穀豊穡を祈願する目的で行われることなど、地域の特色あるボートレース活動について知ることができました。この他にも沖縄の歴史や民俗に関する別の資料も見つかり、沖縄のドラゴンボートを理解するのに大変役立ちました。

また、横浜での現地調査も非常に有意義なものでした。新垣先生のご協力と推薦により、チューターの宋犀子さんと私は横浜中華街にあるローズホテル横浜を訪問しました。台湾人の初代オーナーを持つこのホテルは、古い歴史を有し、2013年からは横浜市のドラゴンボートレース大会にメンバーを組んで参加しています。私たちを受け入れてくれたスタッフは、チームに参加して水上での競技をしたことがなくても、陸上でドラゴンボートレ



写真1 日本での研究の発表会

場所：神奈川大学非文字資料研究センター

出典：神奈川大学非文字資料研究センター提供



写真2 Rose Hotel Yokohama ドラゴンボート参加記録
場所：Rose Hotel Yokohama
出典：筆者撮影

ースの熱気や、競技に参加する人々の熱意や喜びを感じることができると話していました。横浜市のドラゴンボートレースはすでに近代的なスポーツ競技となっていながら、横浜の重要な地域文化活動の一つでもあり、ホテルにとっては、ドラゴンボートレースに参加することが横浜中華街の文化を発信する責務ともなっているのです。順位を獲得することが彼らの主な目的ではなく、従業員に交流と懇親の機会を提供するチームワークづくり活動のようなものであるようです。

神奈川大学での研究期間はあっという間で、わずか20日間の訪問でしたが、私の博士課程の研究に大いに



写真3 筆者（右）と小熊学長（中央）の交流、左は宋犀子さん
場所：神奈川大学
出典：筆者撮影

役立ち、ドラゴンボートの民俗を別の視点から検証し比較する機会を得ることができました。また、小熊誠学長にお会いして懇談する機会も得たことはとても幸運でした。小熊学長はとても親切でフレンドリーで、ご自身の中国訪問の経験を中国語で話してくださり、私たち若者たちに、もっと学び、もっと世界を見るように、と激励してくださいました。民俗学は、国や民族の境界を超え、寛容、尊敬、理解に満ちた学術コミュニティです。中国と日本の民俗学者の交流が末永く続くことを心から願っています。

明治から昭和の日本女性の衣服を視覚化する

キリ・ヴェメテ
(ブリティッシュ・コロンビア大学)



私の博士論文の主な論点は、日常における植民地主義と近代化が、19世紀末から20世紀初めにかけて朝鮮に住んでいた朝鮮人女性、西洋人女性、日本人女性のお互いの交流によって形成されていったということにあります。なかでも女性たちの相互交流において、近代化や植民地主義についての考えを表現する媒介となったものの一つに、衣服があります。衣服はアイデンティティを示すものであり、表現の形でもありました。女性たちは裁縫を通して自分自身や家族、そして集団としての帝国全体の外見をファッションとして作り上げたと言えます。非文字資料研究センターの交換プログラムに参加した私の主な研究目標は、明治末期から昭和初期にかけての日本女性が着ていた衣服についてより詳しく知ることでした。博物館の展示会に行けば、歴史的な着物の例を簡単に見ることができるだろうと期待していましたが、

残念ながら私の訪問した時期にはそのような展示はほとんどありませんでした。東京国立博物館を訪れ、そこに展示されていた美しい正月用の着物に魅了されましたが、それは江戸時代のものでした。とはいえ、実際に着物を見ることで、多角的に装いを観察したり、その構造について学んだりすることができました。また、文化学園服飾博物館も訪問しました。そこでは19世紀末から20世紀初頭の着物をいくつか見ることができましたが、それらは子ども用のものでした。それでもまた、いろいろな角度から着物を観察し、大正時代の子どもの着用物の構造を知ることができました。横浜のシルク博物館にも着物が展示されていました。それらの着物が歴史的なものなのか、それとも複製されたものなのかはわかりませんが、着物を着たマネキンを見ることで、様々な時代を通じて人々がどのように着物を身に着けていたかを